目次

【２０１１年　聖書講筵レジュメ（配付資料等）】

２０１１年

２０１１年５月　「試練の中での希望」　２０１１年５月22日（東京新宿）
２０１１年５月　福音特別セミナー　講筵資料　２０１１年５月28～29日（御殿場ＹＭＣＡ東山荘）
２０１１年６月　『試練の中での希望』はしがき　２０１１年６月５～12日
２０１１年７月「試練の中での希望」（第２回）資料　２０１１年７月10日（東京新宿）
２０１１年８月　夏季福音特別集会　２０１１年８月19～21日（京都くに荘）

レジュメ

２０１１年５月　「試練の中での希望」

２０１１年５月22日（東京新宿）

はじめに、この度の大震災の犠牲となられた方々に対しまして、心よりお悼み申し上げますとともに、被災された方々におかれましては、様々の困難に打ち勝って、生き抜いてくださいますよう、神のご加護とご平安を、心からお祈り申し上げます。

1、この度の大震災によって、それまで営々と築き上げてきたものが、すべて、一瞬のうちに失われてしまった。

尊い多数の命が失われ、土地も住まいも、その他のさまざまの価値あるものが廃墟に化した。

私たちは、何を拠り所として、何をめざして、新しく歩み出せばよいのか。

また、犠牲となった人（命を失った人）のことを、どのように受け止めればよいのか。

2、この度の大震災、それによる多大の犠牲についての神のみ思いは何か。

この点については、私は、人間の側から、「神のみ心」を推し量ることはすべきではない、と考える。

ただ、言えることは、私たち生き残った者、犠牲を免れた者は、尊い犠牲を無駄にしてはならない、ということ。

これまでの生き方を反省して、特に心の面、内面の生き方において、何を最も大切にして生きるべきかの問題に、真剣に取り組まなければならない、と思う。

3、地上の生活において、営々と築き上げてきたもの、

財産や地位、名誉、その他、この世の人が追い求めてきたものは、決して永遠のものではなく、いつかは失われるもの、それどころか、いつ、瞬く間に失われるかもわからない不安定なものであること、人の命さえも、そうであることを自覚しなければならない。

では、何を求めて生きるべきなのか。何が起ころうとも大丈夫、というようなものが、この人の世にあるのか。

4、人は、死んでしまえば、すべて、おしまいなのか。

断じて、そうではない。人間には肉体の死を超えて存続する「霊」が宿っている。人間は本来、霊的存在なのである。『大言海』という辞典の「ひと」を引けば、人を「霊止」（霊（ひ）が止（と）まる）と表し、「神霊の止どまる存在」だから、と解説してある。

キリストは、「復活」という事実をもって、肉体の死をもって終らない命、「永遠の生命」を顕した。

キリストの復活とは、肉体が生き返ったということではなく、イエスという方の内にあ

る霊的生命が、超自然的な、霊の体をもって顕れた、という出来事であった。

しかも、そのような、肉体の死をもっては終らない「永遠の生命（いのち）」と同質の「生命（いのち）」を私たち一人一人に、それを願う者には例外なく与えることを、キリストは願われた。ここに、私たちの希望がある。希望の揺るがぬ土台がある。

ヨハネによる福音書の第11章に、イエスが死んだラザロを甦らされる場面が描かれているが、その前に、イエスが姉妹のマルタに力強く宣言された言葉：

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない。」

私たちは、肉の体を脱ぎ捨てると、直ちに、霊界において、光り輝くキリストにお会いすることができるのである。

5、犠牲となって命を失った人はどうなるのか。

私は、この度の大震災のことで、一番心を痛めておられるのは、天界におられるキリストご自身ではないかと思っている。

最も深く、苦しみ・痛み・悲しみを背負っておられるのは、キリストご自身。

そして、ご自分の十字架上の死をもって、逆に死を滅ぼし、永遠の生命を実証されたキリストは、今、われわれ一人一人のもとに、いつでも、どんなときにも、寄り添ってくださる霊的存在のお方である。

そして、犠牲となった方々お一人お一人の傍に寄り添って、抱きしめ、ご自分の永遠の生命に与らせようとなさっているに違いない、と私は信じている。

キリストの弟子のペテロは、小アジアの各地に居る信者に宛てた手紙の中で、次のようなことを述べている。

キリストが十字架の上で死なれた後、復活の命として地上に姿を現されるまでの間、黄泉（よみ）の国において捕らわれている霊たちのところへ下って行き、その霊たちに救いをのべ伝えられた、と。そして、これらの霊たちというのは、むかし、ノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである、と。

ノアの箱舟のことは、旧約聖書の冒頭の「創世記」の第6章から第9章にかけて出てくるが、その時代に、神は、「人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであるのを見られ」、「地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め」た、と記されている。それで、40日40夜降り続いた大雨による洪水によって、ノアの家族以外の人間がことごとく滅んだという。

ペテロの手紙では、十字架上での死を味わったキリストは、復活体として地上にすがたを現されるまでの間に、地獄にまで下って、そこで苦しんでいる霊たちに宣教された、即ち、救いの手を差し伸べられた、という。

これは、何もノアの時代の人々のことだけではなく、今日に至るまで、救いを必要とす

るすべての霊たちについて当てはまることだと、私は解している。万人を救済しようとの願いをお持ちのキリストならば、そうであるに違いないと私は確信している。

6、私たちの求めるべきもの

では、私たち地上に生きる者の求めるべきものは何か。それは、私たちを、本当の幸せに導くのか。それは、誰でもが得られるものなのか。

使徒パウロの「コリント信徒への第一の手紙」第13章の有名な「愛の讃歌」から。

「愛はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

愛のすがたは、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」という。この愛のすがたは、実は、キリストの私たちに対するすがた、ではないか。

私たちのことを、どこまでも信じ抜き、望み抜く。そして私たちを担い抜く、どんなことがあってもへこたれない、貫きの愛、それがここに謳われている。その愛に触れ、圧倒されて、こちらも、同じ質の人間に変えられていく。そんなふうに思う。私たちの人間関係、社会の在り方もそういう質のものでありたい。

考えてみてほしい。およそ、この世の中のことは、すべて、不安定なもので、何かを信じていないと前へ進めない。そんな中で、

「私は道である、まことである、命である」

と宣言してくださるキリストにこの身をゆだねて歩むこと、これが、私たちの側での、キリストを信じて歩むということだ。

その「信」を下さるのもキリストだ。

「望み」もまた、キリストが私たちの望みの実体である、キリストにおいて望むことは、成就する。み心にかなう願い、望みは、成って行く。ヨハネ福音書第15章7節。

7、聖霊・助け主・真理の御霊

キリストが地上に来て下さった目的は、ひとえに、私たち、一人ひとりの中に宿って、一人ひとりを「天国人」にするため、「神の子」の実を与えるためであったといっても、過言ではない。

「ヨハネによる福音書」の第14章の中のキリストの約束。

「16わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。17それは真理の御霊（みたま）である。……あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。」

「20その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。」

と。『幸福論』や『眠られぬ夜のために』によって、日本においても良く知られているカール・ヒルティは、その『幸福論（第三部）』（岩波文庫版）の中で、このキリストの霊、愛の霊のことを次のように語っている。

ヒルティは、私たちの人生には、それに依り頼む人々にとり、常に新しい生命の泉となるような、「永遠にして滅びない、つねに変わらぬ霊的存在」が必要である、と言う。

そして、この「霊」「聖霊」が宿る結果として、次の三つのものが与えられる、と。

第一に、何ともいいようのない生の喜び、つまり、人間やものごとに対する恐怖からの解放。普通では、これは誰にも得られないものだが、この霊が宿ると人間やものごとに対する恐怖から解放されて、何とも言いようのない命の喜び、生きていることの喜びが湧いてくると。また、いろいろな心配事が無くなるのだと。

第二に、興奮をともなわない、一種の火のような熱情と生気であり、これもまたほかの道では求めても得られないものだ、という。

第三は、人間に対する力。世の中で特別の地位に立たない人でも、自ずと、個人として権威が備わる。そして、その人からは、何か生気があふれ出て、他の誰にも従わない人たちさえも、この人にはよろこんで従うものである、と（300頁）。

そして、この霊を受けるために必要なことは、「真理を見いだして、それに従おうとする真剣な熱望、真実の決意」があれば、それで十分であり、「どんな捧げ物も祭司もいらない。ひたすら神に『心を向ける』こと以外にどのような行為も必要でない。」という（27頁）

8、地上での生き方、この世での責務

地上の様々な価値あるものにとらわれることなく、「天なるもの」、「見えないもの」に目を注ぐということは、決して、この世のことはどうでもいい、無価値である、などということではない。

永遠なるもの、真の実在界の存在に目覚めることによって、かえって、この地上での様々の営み、責任を立派に果たそうという意欲と悦びが湧く。

決して、祈り三昧とか、偏った宗教的生活に埋没することはあり得ない。

マルティン・ルターの言葉：

「たとえ明日、この世界が滅亡すると知ったとしても、それでも、わたしは、今日、わたしのリンゴの苗木を植える。」

このルターの言葉は、永遠の実在界に魂が生きているからこそ、この世の使命を存分に果たし、何が来ようとも、動じないという心意気を表している。

9、最大なるものは「愛」

パウロは、

「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

と「愛」の大切さを教えた。

ヒルティも、

「愛は一切に勝つ」（Amor omnia vincit）

と、「愛」が最大の力であると、力説した。

使徒ヨハネは、その「第一の手紙」において、「愛」のことを次のように語っている。

「16**イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださった。そのことによって、わたしたちは愛ということを知った。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきである。**17**世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見て心を閉ざすような者には、神の愛は宿らない。**18**だから、言葉や口先だけではなく、行いをもって愛を実践しよう**」（ヨハネ一3・16～18）

と。

この度の大震災を契機として、日本国中の人たちが、被災された方々の苦しみや窮乏をわがこととして受けとり、何とかして、少しでも、力になりたい、助け合いたい、との熱い思いで、様々な方法で、その思いを現実に見える形で現しておられることに、私は、深い感銘を受けている。

今まで埋もれていた、眠っていた大切なものが、呼び覚まされた、人間としての原点へと回帰させられたとの思いを抱いている。

神様は、人をご覧になるとき、その人の「宗教」が何であるかによってではなく、その人の生き方が「真実の生き方」であるかどうか、自己中心的な生き方ではなく、愛に根差した生き方であるかどうか、を見ておられると、私は信じている。

無私の心で尽しておられる方々に、そして、苦難の中で懸命に生き抜こうとなさっている方々に、神のご加護と祝福が豊かでありますようにと、心からお祈りいたします。

最後に、キリストは、地上に生きる私たち一人ひとりの中に、誰でも、心から願いさえすれば、宿ってくださる、無条件に来てくださるということを、ぜひ、知っていただきたいと願う。

私は、このお方のことを、「キリスト教」という「一つの宗教」の枠の中に閉じ込めてほしくない、と願っている。

自然界の太陽が、悠久の昔から、この地球に光と熱と命を与え続けてきたように、霊界の実在者にして愛の権化、永遠の生命であるキリストは、地上の生きとし生ける者一切に光と愛を、そして霊の命を与えて止まないお方である。

日本のみならず、世界の人々が、この事実に気づいてくださるようにと願ってやまない。

講筵資料

２０１１年５月　福音特別セミナー

２０１１年５月28～29日（御殿場ＹＭＣＡ東山荘）

●第一部　福音を生きる

Ⅰ　試練の中で福音を生きる

この度の大震災によって、それまで営々と築き上げてきたものが、すべて、一瞬のうちに失われてしまった。尊い多数の命が失われ、土地も住まいも、その他のさまざまの価値あるものが廃墟と化した。そうした中で、私たちは、何を拠り所として、これからも、揺らぐことなく生きることができるのか。神の御言葉は何を語りかけているのか。

1、地上のもの、形あるもの、見えるものは、すべて一時的なものであり、永遠に続くものは存在しないこと。

人の命は持ち物（財産）の豊かさには関わりないこと。まず神の国と神の義を求めるべきこと。

「6……肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。7草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。8草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」（イザヤ40・6～8）

「18我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」（コリント後4・18）

「18わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（口語訳　コリント後4・18）

「15あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」（口語訳　ルカ12・15）

「18こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。19そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ。20すると神が彼に言われた、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」21自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである。」（同　ルカ12・18～21）

2、ペテロ一1・3～9

「3ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、4あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。5あなたがたは、終りの時に啓示されるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。6そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。7こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。8あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。9それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである。」（ペテロ一1・3～9）

ヤコブの手紙から

「2……あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。3あなたがたの知っているとおり、信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである。4だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。」（ヤコブ1・2～4）

「12試練を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。」（ヤコブ1・12）

コリント信徒への手紙一

「13あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」（コリント一10・13）

●＝　日本の中で福音を生きる

1、現代の日本の中で福音を生きることは並大抵ではない。

①科学万能の現代において「宗教」などという非科学的なものを信ずる者は無知な人間だという観念。こう考える人たちは、自然科学的に認識可能なもの、証明可能なもの以外は信じない、認めない。神だとか、霊だとかは、認めない。信じない。

「神は霊なれば、拝する者も、霊とまこと（真実）をもて拝すべきなり」

といったことを受け入れない。こういう科学万能主義は、どの国でも、いつの時代にも存在するから、問題にする必要はない。自らの無知をさらけ出しているだけだから。

②日本には、古来、様々な宗教的慣習・習俗が根強い。冠婚葬祭は、現在もそれにのっとって営まれることが多い。それらとどう折れ合って行くか。

③日本では、仏教が主流である。無信仰の人でも、仏教や仏教行事には親和的である。キリスト教に対しては、外来の宗教であるとして、排斥的・敵対的態度をとる人が多いのではないか。「なぜ、キリスト教なのか？」という問いかけに答えなければならない。

これは、心理的にも負担であり、ストレスの原因にもなる。

日本では、「家」の宗教という観念が根強い。「家」の宗教にのっとって葬儀やその後の諸行事が営まれる。墓の問題もおろそかにできない。個人としてのクリスチャンは孤立しがちである。その人一代限りで終ってしまうことが多い。

「家」対「個人」という関係になる。

「34わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。35わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。36こうして、自分の家族の者が敵となる。37わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。……39自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」（マタイ10・34～39）

「49わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。……51あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。52今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。53父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。」（ルカ12・49～53）

④知者は福音を愚かとする。富める者、能力のある者は、福音（キリスト）を必要としない。

「18十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。（それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救わるる我らには神の能力（ちから）なり。）……『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。』（われ智者の智慧をほろぼし、慧き者のさときを空しうせん）20……神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。……22ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたしたちは、

十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、……[24]ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。[25]神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」（コリント一１・18～25）

⑤福音の厳しさ（自己否定）

「[23]それから、イエスは皆に言われた。わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。[24]自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。[25]人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。」（ルカ９・23～25）

「[25]大勢の群衆がついてきたので、イエスは彼らの方に向いて言われた、[26]「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。[27]自分の十字架を負うてわたしについて来る者でなければ、わたしの弟子となることはできない。……[32]もし自分の力にあまれば、敵がまだ遠くにいるうちに、使者を送って、和を求めるであろう。[33]それと同じように、[28]あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切る者でなくては、わたしの弟子となることはできない。[34]塩は良いものだ。しかし、塩もききめがなくなったら、何によって塩味が取りもどされようか。[35]土にも肥料にも役立たず、外に投げ捨てられてしまう。聞く耳のある者は聞くがよい。」（ルカ14・25～35）

日本人の宗教観は、神社・寺院に祭られている神・仏は、人間の欲望や願いを聴き届けてくれる存在であって、人間の側に難しい注文をしたりしない。なんでも聴いてくれる神様は、霊験あらたかであり、尊ばれる。ご利益宗教である。

また、現世中心であり、来世のことに意を用いない。

●Ⅲ　福音の核心

1、十字架・聖霊

（1）霊の次元・天の次元に生きる。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真（まこと）とをもて拝すべきなり」（ヨハネ４・24）

「真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父はかくのごとく拝する者を求めたもう」（ヨハネ４・23）

「[3]はっきり言っておく。人は、新たに生れなければ、神の国を見ることはできない。……[5]だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入る

ことはできない。6肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。……8風は思いのままに吹く。貴方はその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」（ヨハネ3・3～8）

「13天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。14そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

16神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」（ヨハネ3・13～18）

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」（ヨハネ6・63）

ローマ書8章から

「1こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。2なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。3律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。4これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。5なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。6肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。……9しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。10もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。11もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう。……14すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である。15あなたがたは……子たる身分を授ける霊を受けたのである。……16御霊みずから、

わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。17もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。」（ロマ８・１～17）

（２）十字架・聖霊

「3……キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。4……（それによって、）彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。……6……わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが滅び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。」（ロマ６・３～６）

ガラテヤ書から

「15わたしたちは生れながらのユダヤ人であって、異邦人なる罪人（つみびと）ではないが、16人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。……19わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。20生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」（ガラテヤ２・15～20）

「2わたしは、ただこの一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。3……御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるというのか。……5あなたがたに御霊を賜い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。」（ガラテヤ３・２～５）

（３）聖霊・助け主・真理の御霊

ヨハネ福音書14章～16章より

ヨハネ14・16～26

「16わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。17それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

18わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰

ってくる。19もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。20その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。21わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。……23「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。24わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である。

25これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。26しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう。」（ヨハネ14・16～26）

ヨハネ15・26

「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。」（ヨハネ15・26）

ヨハネ16・7～15

「7しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。……12わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない。13けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。14御霊はわたしに栄光を得させるであろう。わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるからである。15父がお持ちになっているものはみな、わたしのものである。御霊はわたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせるのだと、わたしが言ったのは、そのためである。」（ヨハネ16・7～15）

2、福音を生きる中心は「愛」

コリント前書13章

「4愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕(おご)らず、5非礼を
行わず、己の利を求めず、憤らず、人の悪を念(おも)わず、6不義を喜ばずして、
真理の喜ぶところを喜び、7凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、
おおよそ事耐うるなり。8愛は長久(いつ)までも絶ゆることなし。……13げに信仰と
希望と愛と此の三つの者は限りなく存(のこ)らん、而して其のうち最も大(おお)なるは愛
なり。」（コリント前13・4～13）

ローマ書12章から

「9愛には偽りがあってはならない。……10兄弟の愛をもって互にいつくし
み、進んで互に尊敬し合いなさい。11熱心で、うむことなく、霊に燃え、主
に仕え、12望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。13貧しい聖徒
を助け、努めて旅人をもてなしなさい。14あなたがたを迫害する者を祝福し
なさい。祝福して、のろってはならない。15喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共
に泣きなさい。16互に思うことをひとつにし、高ぶった思いをいだかず、か
えって低い者たちと交わるがよい。自分が知者だと思いあがってはならない。
17だれに対しても悪をもって悪に報いず、すべての人に対して善を図りなさ
い。18あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。19愛する
者たちよ、自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。……21
悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。」（ローマ12・
9～21）

ローマ13・8～10

「8互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛す
る者は、律法を全うするのである。9『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさ
ぼるな』など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局『自分を愛するよ
うにあなたの隣り人を愛せよ』というこの言葉に帰する。10愛は隣り人に害
を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。」（ローマ13・
8～10）

ヨハネ13・34～35

「34わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。
わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。
35互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であること
を、すべての者が認めるであろう。」（ヨハネ13・34～35）

ヨハネ15・9～17

「9父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。

わたしの愛のうちにいなさい。10もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。11わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、またあなたがたの喜びが満ちあふれるためである。

12わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。13人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。……

16あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。17これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」（ヨハネ15・9～17）

ヨハネ第一書3・14～24

「14わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのちへ移ってきたことを、知っている。愛さない者は、死のうちにとどまっている。……16主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。17世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあろうか。18子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。19それによって、わたしたちが真理から出たものであることがわかる。そして、神のみまえに心を安んじていよう。……21愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。22そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。23その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。24神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。」（ヨハネ一3・14～24）

ヨハネ第一書4・7～21

「7愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生まれた者であって、神を知っている。8愛さない者は、神を知らない。神は愛である。9神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。10わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。11愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。12神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。

13神が御霊をわたしたちに賜ったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。14わたしたちは、父が御子を世の救主としておつかわしになったのを見て、そのあかしをするのである。15もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである。16わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。17わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。18愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。19わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。20『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。21神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。」（ヨハネ一４・７～21）

●第二部　日本における福音の持続的展開と継承のために

Ⅰ　キリスト召団の存在理由は何か

強固な制度と伝統に支えられたカトリック教会、それぞれに独自の組織を有するプロテスタントの諸教会が存在する中で、キリスト召団の存在理由はどこにあるか。各キリスト召団は、信仰の「仲良しクラブ」的集まりなのか、伝道および召団（という団体）についての明確なビジョン、目標をもって祈り、学び、助け合い、支えあう「主にある兄弟姉妹の群れ」であると言えるか。

こうした点について、われわれの自覚は十分であったとは言えないように思われる。

このセミナーの機会に、われわれのよって立つ基盤を再認識するとともに、その存在理由と使命を自覚したいと考える。

II 「福音」の持続的展開と継承のために

1 家庭において

「個人」の信仰にとどまらないで、「家族」も同じ信仰をもって「福音を生きる」同志となってくれるように。一人ひとりは、独立の人格であり、その自由を尊重しつつも、同じ祈りと願いに生きる友であってほしい。特に、夫婦が同じ信仰の道を共に進むことができるように、これから家庭を持つ人は、これを大切にしていただきたい。難しいことかもしれないが、祈りの課題としてほしい。

2 召団の持続的展開と継承のために

参考までに、京都キリスト召団の歩みを紹介したい。

現在は、奥田が代表であり、リーダーとして聖日集会を主宰し、いわゆる牧会の任に当たっている。他から強いられてではなく、専ら、主キリストから賜った使命であるとの自覚のもとに、１９７２年から続けてきた。配偶者の幸子姉が同労者として支え合ってきた。奥田が天に召された場合、それでも召団としての持続性・継続性を保証する手段として、何よりも、召団の資産（献金が主）を奥田の個人財産と明確に分別し、税務当局に認めてもらう必要がある（そうでないと、相続財産として扱われてしまう）。そのために、「一般財団法人」の形態を選択した（宗教法人になるには、条件が厳しすぎるので無理であった）。その過程で、これまでの「京都キリスト召団」の規約を作成する必要が生じた。

そこで、次のような「京都キリスト召団　規約」をまず作成した。

「（名称）
第１条　この団体は、京都キリスト召団と称する。
（所在地）
第２条　（略）
（設立年月日）
第３条　（略）
（目的）
第４条　この団体は、広くイエス・キリストの福音を宣べ伝え、また聖書の身読を通して福音の神髄を体得し、信徒の人格及び霊性の向上に寄与することを目的とする。
（構成員の資格）
第５条　この団体は、第４条の目的に賛同して構成員になることを希望するキリ

スト信徒及び求道者をもって構成員とする。

（役員）

第６条　この団体に次の役員を置く。

代　表　奥田昌道

副代表　錦織成史

会　計　奥田幸子、森満夫

（事業）

第７条　この団体は、第４条の目的を達成するため、次の事業を行う。

（１）聖日（日曜日）集会の開催

（２）福音伝道を中心とした講演会の開催

（３）冊子、書籍等の出版物の刊行

（４）その他、前各号に関連する事業

（会計）

第８条　第７条の事業を行うために必要な費用は、構成員の自由な拠出金（献金）を持ってまかなうこととし、拠出金の管理は会計が担当する。

会計担当者は、年１回、構成員に対して会計報告を行う。」

後日の「一般財団法人京都キリスト召団」の定款（規則）において、「目的」は、上記の規約の第４条（目的）を、「事業」は、同第７条（事業）を、そのまま採用した。

このような「規約」を作成したことによって、わたしたちの目標や使命が明確になったように思われた。

今、わたしたちの祈りの課題の一つは、奥田が世を去った後にも、京都キリスト召団が持続的に展開を遂げ、日本における福音の証者として、継承者として、揺るぎなき歩みを続けていただくように、次代の担い手を育成することである。これについて、わたしは一つのビジョンを有している。セミナーの席で、開陳したい。

講筵資料

２０１１年６月

『試練の中での希望』はしがき

２０１１年６月５～１２日

２０１１年３月11日、この日を私たちはいつまでも忘れることはないであろう。これまでもわが国土は、様々の自然災害に見舞われてきたが、今回は、それらを遥かにしのぐ大規模かつ深刻な被害をもたらし、その傷跡は被災者の方々はもちろん、直接の被災を免れた私たちにも深く刻み込まれている。

本冊子（『試練の中での希望』２０１１年10月15日発行）に収録された三編は、こうした状況を背景として行われたラジオ放送と、二回の講演を文字化したものである。放送と講演のテープ起こしから小見出しの挿入に至るまでの面倒な作業は、すべて、澤田正信兄（東京キリスト召団新宿集会会員）が引き受けてくださった。二回の講演については、性質上繰り返しや記憶違いからの誤りもあることから、かなりの修正を施している。冊子に作成するに当たっての体裁や、ゴチック文字を使用することで、講演時に配布した資料と、それを基にした私の解説とを区別する工夫などは、小池牧子さん（東京キリスト召団新宿集会代表）が担当してくださった。ご両人のご愛労に対して心からの謝意を表したい。

冒頭の「幸福の条件　――私たちの本当の幸福はどこにあるのか――」は、東日本大震災から二か月ばかりを経た5月16日に、かつてNHKラジオ深夜便「こころの時代」の放送（２００８年4月17日、18日放送の「幸福への道」）を担当してくださった金光寿郎ディレクターが京都の拙宅までお越しくださって収録し、NHKラジオ第二放送の「宗教の時間」（6月5日の午前と6月12日の午後）において放送されたものである。

「試練の中での希望」は、ラジオ放送のために準備した草稿を基にして、ラジオ放送の続篇の意味を込めて、5月22日に東京キリスト召団新宿集会主宰の「キリスト道講演会」において語ったものであり、「同（第二回）」は、さらにその続編の意味を込めて語ったものである。これらは、いずれも、聖書の記述を基にしている。常々、私は、新約聖書におけるキリストの言や使徒たちの語りかけは、当時の社会や時代の制約を免れないものの、決してそれに限定された閉ざされた内容のものではなく、時代を超え、民族や地域を超えた普遍性を秘めたものであり、そこから何を汲み取り、どう現代に生かすかは、私たち一人ひとりに課せられた課題であると思っている。私の心からの願いは、本冊子の講話に込められている。

困難な状況の中で苦闘されている方々が、本冊子を通して、少しでも希望の光を見出され、勇気を得て新しい人生へと踏み出していただけるならば、こんな嬉しいことはない。また、直接の被害に遭われなかった方々にも、本冊子が「人間の生」についての思索を深める端緒となるならばと願っている。

講筵資料

２０１１年７月「試練の中での希望」（第２回）

２０１１年７月10日（東京新宿）

聖書（今回は新約聖書）は、艱難、苦難、試練に対して、私たちに、どのように語りかけているだろうか。

聖書における語りかけは、その時代、その社会の状況の中で語られているから、そのような背景、状況による制約を免れない。それゆえ、その語りかけを、そのまま直ちに現代の私たちに適用することは適切とは言えない。それにもかかわらず、なお、聖書に流れている世界観（特に終末観）は私たちに示唆するところは大きいと言わねばならない。

●Ⅰ　聖書の世界観（終末観）

聖書は、この世界（地上界）がそのまま天国的な理想社会（神の国）に転化するとは見ていない。必ず終わりが来る（世の終わり、終末の到来）ことを告知し、それを目前に控えた緊張の中で、現在を生きること、そのような生き方はいかに在るべきかを語る。

１、ペテロ第一の手紙から

第１章３～９、13、20～21

「3わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、4また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。5あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。6それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、7あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。8あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。9それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」（ペテロ一１・３～９）

「13だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」（ペテロ一１・13）

「20キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。21あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」（ペテロ一1・20～21）

第4章7～8、4・12～14

「7万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。8何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。」（ペテロ一4・7～8）

「12愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。13むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。14あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。」（ペテロ一4・12～14）

2、ペテロ第二の手紙から

第3章3～13

「3終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけって、4こう言います。『主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。』5彼らがそのように言うのは、次のことを認めようとしないからです。すなわち、天は大昔から存在し、地は神の言葉によって水を元として、また水によってできたのですが、6当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。7しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。

8愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。9ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。10主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。11このように、すべての

ものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。12神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。13しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」（ペテロ二3・3～13）

3、福音書のイエス・キリストの言葉から

マルコによる福音書第13章（参照：マタイ福音書第24章、ルカ福音書第21章5～36節）

「1イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。』2イエスは言われた。『これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。』

3イエスがオリーブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。4『おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか。』5イエスは話し始められた。『人に惑わされないように気をつけなさい。6わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。7戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。8民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。9あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。10しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。11引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのは、あなたがたではなく、聖霊なのだ。12兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。13また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。』

14『憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら――読者は悟れ――そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。15屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。16畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。17それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。18このことが冬に起こらないように、祈りなさい。19それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今まで

なく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。20主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。21そのとき、『見よ、ここにメシヤがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。22偽メシヤや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。23だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言っておく。』

24『それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、25星は空から落ち、天体は揺り動かされる。

26そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。27そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。』

28『いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。29それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。30はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。31天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。』

32『その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存知である。33気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。34それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。35だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。36主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。37あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。』（マルコ13・1～37）

●Ⅱ　艱難、試練の中での希望、勝利

1、使徒パウロの場合

使徒パウロは、艱難、苦難、試練に対しても、決して屈することなく神・キリストの力、聖霊の力によって乗り越えていった。パウロの直面した艱難、苦難は、多くはキリストを信じるが故のそれであったが、そのほかにも、様々の苦難を経験している。パウロのように天界のキリストから直接に使徒として召され、使命を賜った「聖霊の器」でさえも、あ

れほどの艱難、辛苦に遭遇し、耐えなければならなかったことは、逆に私たちを勇気づける。艱難、苦難、試練に遭遇することは、決して、その人の信仰の有無、信仰の強さ・弱さ、深さの如何とは関わりがないことが分かるからである（そこには、人の側からは測り知り得ない深い神の御旨があることを信じて、安んじて主キリストのみ手に委ねればよいからである）。

（1）コリント人への第二の手紙から

第1章3～11節

「3わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かに下さる神がほめたたえられますように。4神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。5キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。6わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。7あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。

8兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知ってほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。9わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。10神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これからも救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。11あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。」（コリント二1・3～11）

第11章23～27節　パウロの遭遇した苦難の列挙

「23……苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。24ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。25鞭（むち）で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。26しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞

からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、27苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」（コリント二11・23～27）

（2）ローマ人への手紙（ローマ書）から

第5章1～5節

「1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りとしています。3そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、4忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ローマ5・1～5）

第8章18～30節　（将来の栄光）

「18現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います。19被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23被造物だけでなく、〝霊〟（御霊）の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。25わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

26同様に、〝霊〟（御霊）も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、〝霊〟（御霊）自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。27人の心を見抜く方は、〝霊〟（御霊）の思いが何であるかを知っておられます。〝霊〟（御霊）は神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。28神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働

くということを、わたしたちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。」（ローマ８・18～30）

（参考）コリント人への第二の手紙

第４章16～18節

「16だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。17わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。18わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリント二４・16～18）

ローマ人への手紙第８章31～39節　キリストの愛の勝利

「31では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。36『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。38わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマ８・31～39）

2、ヤコブの手紙から

第１章２～４、12節

「2わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと

思いなさい。[3]信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。[4]あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」（ヤコブ1・2～4）

「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。」（ヤコブ1・12）

講筵資料

２０１１年８月　夏季福音特別集会

２０１１年８月19～21日（京都くに荘）

はじめに

今回の特別集会全体を貫く主題は、

「現代の日本においてキリストの福音に生きる」

「現代」は実に大変な時代である。東日本大震災と大津波、加えて原子炉の事故という未曽有の事態に我々は直面している。世界的には、異常気象のもたらす様々な問題、地震、津波、干ばつと飢饉、絶えない民族間ないし国家間の紛争など。

「日本」は我々クリスチャンにとっては「外国」である。つまり、我々は日本では「異邦人」なのである。その上、我々の頂いている「福音」の事態は、「十字架・聖霊」一如の「御霊のキリストの生命（いのち）」に生きる、天界（霊界）のキリスト直結の事態であり、現代の西欧や日本のキリスト教会では受容されないような内実のものである故、キリスト教会の中の「異邦人」でもある。こうした状況下で「キリストの福音に生きる」ことは、並大抵のことではない。各人は、その覚悟を常に忘れないでほしい。

次に、各人は、独立独歩のクリスチャンであってほしい。「個」として独立独歩の内実を有したクリスチャンであってこそ、エクレシア（集会、召団）の一員として有為な働きをなすことができる。どんな境遇にあっても、どんなところに移り住むことになっても、そこで信仰を貫き、祈りの群れを形成していけるような（それが独立独歩の意味）クリスチャンであってほしい。

今回の特別集会において、御霊のキリストの内住をはっきりと自覚（体験）し、御霊のキリストに化された存在と変えていただくように真剣に祈ってほしい。

この特別集会は毎年開かれるのか、来年はどうなるのか、誰にもわからない。われわれの生命（地上のいのち）すら、いつ、どこで、どうなるか、だれも予測できない。だから、主キリストは、「常に目を覚まして祈っているように」と諭された。

第一回集会の主題　「試練の中でキリストの生命（いのち）に生きる」

ピリピ書から学ぶ

第二回集会の主題　「御霊の生命（いのち）の勝利」

コロサイ書、ローマ書、ヨハネ伝から学ぶ

第四回集会の主題　「棄身の祈り」

祈りの土台は十字架

「我キリストとともに十字架につけられたり。もはや我生くるに非ず、キリスト我が内に在りて生くるなり」（ガラテヤ2・20）

「十字架に付けられ給いしままなるキリスト」（コリント前1・23、2・2、ガラテヤ3・1～3）

の中に身を投じる。「主よ！」の一言で足りる。

第五回集会の主題　「キリストの証者として生きる」

ヨハネ伝16・33

ヨハネ第一書5・4～5

1、この世の価値観に対して

ヨハネ第一番2・15～17

ピリピ書3・18～21

2、この世の習俗・宗教観に対して

地域・町内会などでの神社の祭礼に際して

京都では地蔵信仰に基づく行事としての地蔵盆

結婚式、葬式に際して

妊娠・出産・宮詣で・七五三など

家庭内における仏壇、先祖崇拝に対して

これらにおいては、周囲（職場、地域・町内会、家族・親戚など）が当然視する事柄がわたしたちにとってはそうではないこととの板挟み葛藤と言えよう。

日本では、「家」の宗教という観念が根強い。「家」の宗教にのっとって葬儀やその後の諸行事が営まれる。お墓の問題（死後、どの墓に入るか、誰が墓を守っていくか、など）も疎（おろそ）かにできない。案外、こうした問題のために、キリスト信者にならない、なれない、という人も多いのではないかと思われる。

3、日曜日に行われる諸行事に対して

わたしたちにとっての聖日集会（礼拝）の意義

日曜日の出勤、レクリエーション、運動会等

日本では、日曜日は単なる休日にすぎない。宗教的な意義とは無関係。

それ故に、クリスチャンには、葛藤が生ずる。世の人は、このような葛藤があって苦労していることを理解できないだろう。家族内・家庭内においてもクリスチャンは孤立しがちである（家族旅行、家族の祝い事のために親戚が集まる、といった場合にどうするか）。

以上に関連する聖句

マタイ福音書10・34～39

ルカ福音書12・49～53

クリスチャンにとっての日曜日、聖日集会の意義

起源は旧約聖書の安息日遵守の律法：　出エジプト記20・8～11と申命記5・12～15は、安息日の意義について微妙に異なっていることに注意。

マタイ福音書12・1～7に安息日についての主イエスの態度が示されている。特に7～8節。

マルコ福音書2・27「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」同3・1～5も参照。

ヨハネ福音書5・1～18では、安息日に神の愛の御業（癒し）を積極的になされるイエスの態度がはっきりと示されている

「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」

と。コロサイ書2・16～17も注目に値する。

「これら（安息日を含む様々の規律・定め）は、やがて来るものの影にすぎず、実体はキリストにあります。」

と。クリスチャンが、日曜日を安息日（聖日）として守っているのは、イエスが日曜日（週の初め）に復活されたので、初代教会の人々は、イエスの復活の日を記念して、安息日としたためである。

以上をまとめると、わたしたちにとって、日曜日は、日常の仕事の手を休めて神の賜う安息（安らぎ）の中に安らう日、即ち、主キリストの御懐に身を委ね、み言葉・御霊をいただき、内的に（霊において）新たにされ、強められ、また新しく前進する力をいただく日、ということになる。み言葉、御霊、祈りに満ちた集会に集うことによって、一人ひとりが強められ、成長するとともに、集会員が互いに主キリストにあって結ばれた者、神の国の民であるとの自覚を新たにさせられるのである。

4、この世の智者・賢者・富者に対して

智者・賢者・富者は、福音を愚かとする。福音（神による救い・導き・助け・守り）を必要としない。

これに対する聖句：コリント前書1・18～25